

氏名	立川 清子
ヨミガナ	タチカワ キヨコ
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第268号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 リヒャルト・シュトラウス《薔薇の騎士》 一元帥夫人を中心にその考察と演奏課題— 〈演奏〉 R・シュトラウス 《薔薇の騎士》第1幕、第3幕より抜粋

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	佐々木 典子
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	甲斐 栄次郎
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	寺谷 千枝子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	檜山 哲彦

(論文内容の要旨)

《薔薇の騎士》は、リヒャルト・シュトラウスが作曲した5作目のオペラである。

1911年1月26日、エルンスト・フォン・シュフの指揮のもと、ドレスデン宮廷歌劇場で初演され、歴史的な大成功を収めた。当時、《薔薇の騎士》を観に行くためのベルリン発ドレスデン行きの特別列車が用意されたほどで、その人気は初演以来、今日に至るまで衰えることがない。20世紀に書かれたすべてのドイツ・オペラのなかで、《薔薇の騎士》は同じくシュトラウス作曲の《サロメ》と並んで、もっとも人気の高い演目といえることができるだろう。

その《薔薇の騎士》の物語は、青年貴族が年上の愛人に別れを告げ、不埒な恋敵をこらしめて若い娘と結ばれるという、変装と計略のおもしろおかしい恋愛喜劇である。また、第三幕で元帥夫人がふと口にするように、それは「ウィーン風の仮面劇、ただそれだけのこと」といってもいい。「音楽のための喜劇」と銘打たれた《薔薇の騎士》は、ホフマンスタールとシュトラウスが〈第二の《フィガロの結婚》〉をめざした作品であった。

《サロメ》(1905年)、《エレクトラ》(1909年)と2作続けて神話のヒロインのすさまじい情念の爆発を描いたシュトラウスは、次作の《薔薇の騎士》では打って変わって明朗なロココ風の喜歌劇を手がけたのである。時代は18世紀で、かつらとお仕着せの貴族社会が背景となっている。元帥夫人には伯爵夫人ロジーナの、オックス男爵にはアルマヴィーヴァ伯爵の面影がある。劇中で〈女装〉する男装役のオクタヴィアンが、ケルビーノと同類のような配役であることは言うまでもない。

しかし、ウィーンの世紀末の最も繊細な詩人の筆による《薔薇の騎士》には、すこぶる精妙な軽いタッチによって、少なからず重くもあるテーマも盛り込まれている。

それは、〈時の移ろい〉というテーマだ。自分がもう若くはないことを自覚しはじめている元帥夫人は、年下の愛人オクタヴィアンとの、いずれおとずれるであろう別れを予感しながら、第一幕後半の印象的なモノログを語る。〈時〉のテーマは、ごくふつうの軽い会話のやりとりの中にも、繊細な形で表現されている。

たとえば第一幕冒頭の場面で、元帥夫人はオクタヴィアンにこう言う。

「Jetzt wird gefrühstückt. Jedes Ding hat seine Zeit.」

「朝食にしましょう、その時間ですもの。」

直訳すれば、「何事にもその時がある」となる何気ないやりとりの中の一語だが、取りようによっては、「何事にもその持ち時間がある(すべてのものに終わりが来る)」という意味にもなる。《薔薇の騎士》のこの物

語の中には、こうした微妙な陰影を持つ言葉が少なくない。ウィーン世紀末の没落と崩壊の予感が、《薔薇の騎士》という明朗なロココ趣味の喜劇の世界に、淡い憂愁の影を落としている。

この秀逸な台本にシュトラウスは腕によりをかけて変幻自在の音楽を書いている。愛の場面の官能的な響き、軽やかなモーツァルト風の楽曲、音楽による心理や状況の的確な描写、甘美でしかも皮肉めいたワルツの扱い、精妙な和音進行、その絢爛豪華なオーケストレーション——台本の持つ微妙なニュアンスをあますところなく引き出している。

貴族社会に生きた女性の間には蠢く恋愛事情が根源にあるが、今日の観衆にも多く共感をいだかれる普遍的なメッセージを放つ元帥夫人の人物像について、我々は魅了されている。シュトラウスとホフマンスタールの共同で作られられた本作への解釈を深めることを通して、自身の演奏においてより深い表現を目指すために、本研究を行った。

論文は3章から構成されている。

第1章では、《薔薇の騎士》の成立に至るまでの背景を、主にシュトラウスとホフマンスタールの往復書簡をもとに概観。

第2章では、《薔薇の騎士》の総体的な分析を行う。この作品の意図する内容、各幕が示すその物語と特色、またその中で蠢く中心人物のそれぞれの特徴、心理変化、役柄がはなつ、このオペラにおける意味合いなどを中心に、考察する。そして、論者が課題とする元帥夫人の役柄について、関わりの深いその他の役柄との比較を用いながら、彼女のその言葉や行動、存在の深みを考察。

第3章では、実際に元帥夫人を演奏する際における、目指すべき歌唱表現の在り方を、論者による実践とこれまでの経験をもとに総合的に考察。

また終章にて、演奏家としての一般論、心得などを、論者の実践と経験をもとにまとめの考察。

(総合審査結果の要旨)

平成28年2月21日(日)東京芸術大学音楽学部第6ホールにて16時より立川清子の博士学位審査演奏会が行われ、演奏会のあと論文の口頭試問が執行された。

申請者は、R.シュトラウス、《薔薇の騎士》——元帥夫人を中心にその考察とその演奏課題——を論文題目に上げているように、R.シュトラウスの薔薇の騎士から1幕、3幕の元帥夫人のシーンをできる限り演奏した。第2回の博士リサイタルでは同オペラの1幕の元帥夫人のモノログと1幕の終幕までをオクタピアンに舞台俳優をたて演じた。今回は実際に声楽の共演者と指揮者、演出家も立て、ピアノ伴奏ではあったが、舞台装置、衣装など申請者はできる限りオペラの舞台に近い状態で公演に臨んだ。第2回の演奏もとても素晴らしかったが、今回の学位審査演奏は、申請者の声もまた一段と成熟し、共演者との音楽の会話ができることでより深い表現に繋がった。元帥夫人—マルシャリンはヨーロッパのオペラ歌手、ソプラノだけではなく女性の歌手が一度は歌ってみたい役で、ただ声楽のテクニックやアクロバティックな旋律を披露するというより、心の内面をホフマンスタールとシュトラウスの言葉と音楽で、決して深刻にならず時には軽くコケットに、でも聴衆の魂には深く染み込むように演奏する誰もが憧れる役である。申請者、前回より一段とレベルアップし、テキストを頭だけで理解するのではなく、申請者自身の内面からの言葉として表現出来ていた。チャーミングな部分、大人の女性としての美しさ、そして音色と音楽がモノトーンにならず、申請者の音楽、言葉となって表現されていた。勿論年齢的にこの役は今後もっと変化していくであろうが、大変高いレベルの演奏であった。また論文においては、特に、元帥夫人マルシャリンを演奏する際の発声法、これはどのシュトラウス作品にも共通していくことであるが、頭蓋骨全体の響き特に鼻、鼻腔あたりの空間を作り決して鼻声ではなくそこに呼吸を持って空気を共鳴させ、会場の空間に響かせていく。ヨーロッパのシュトラウス歌いとされる歌手はそのピアノ技法を一番研究する。シュトラウスの音楽に於いてピアノ、ピアノシモが一番聞こえなくてはならない、そしてホールの桟敷まで声が響いて行かねばならない。そのテクニックについても申請者が工夫、研究していることなど自身の経験を通し良く論じられている。非常に高いレベルの演奏と声楽家としての実践に基づいた論文双方を通して、合格とした。